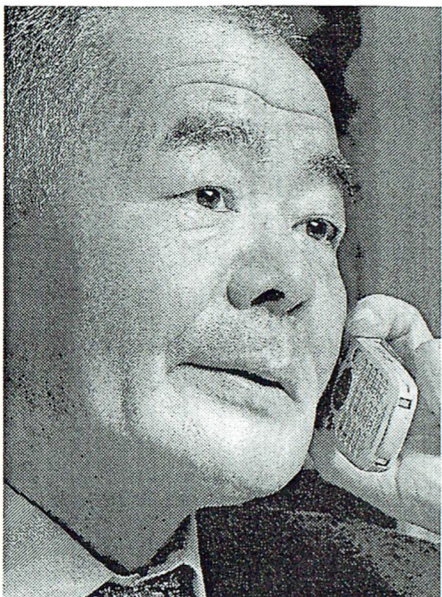


団塊世代に「ふるさと回帰」を呼びかける高橋 公さん(58)

セカンドステーション



「ふるさとの海や山、川や田園が廃れば、都市も国も滅びる。定年後はふるさとに帰ろう」
都会暮らしを続けた団塊の世代に、高橋さんはそう呼びかけている。連合や農協、生協などをつくるNPO法人「100万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センター」(略称、ふるさと回帰支援センター)の事務局長だ。

1947年、福島県相馬市生まれ。ノンセクト「早大反戦連合」の元リーダー。自治労、連合などをへて、ふるさと回帰支援センターへ(画03・5776・1543)。

一時的に住みたい人、農業に関心を持つ人、リゾート感覚の人など多様だ。そんな人たちに就業、定住などの情報提供や支援事業を通して、都市生活者と地方を結ぶのがセンターの仕事だ。

「今こそ、都市と農山村の交流によるサステナブル(持続可能)な共生・循環型コミュニティをつくれる。誰もがいきいきと生きられる社会をつくり、国を元気にしたい」と高橋さんは語気を強める。

「団塊の世代がどう動くかで、時代の流れは変わる」

○全共闘の夢

父は漁師で、5人兄弟の長男。横浜の高校在学時に学生運動を始め、早大で全共闘運動に身を投じた。

「国や大学は、このまままでいいのか、という素朴な思いからセクトにとられない自前の運動を始めた。大学本部を占拠したとき、解放感がありましたよ」

運動は挫折し、大学を中退した。職を転々として過ごす。国会議員の選

「沈黙の世代」がどう動くかで時代の流れは変わる

「ふるさとで人生を輝かせよう」と語る高橋さん—塩入正夫写真



ちよつと一言

69年4月、早大本部を占拠し、バルコニーにいた「ハム(高橋さんの愛称)」さんの姿を覚えている。夜、

そこから高倉健の歌「網走番外地」が流れた。あれも、時代の流れに抗し、自己解放を求める人への「応援歌」だったのだろうか。

中退後、飲み屋の用心棒をしていた。今、塾講師の妻と2人暮らし。子供はいない。「ずっと団塊世代を応援する旗を振り続けているけど、高橋さん自身の『ふるさと回帰』は？」と聞けば、「将来は、故郷の福島ではなく、高知あたりに住みたいなあ」と笑った。

「団塊」探見

池田知隆の(論説委員兼編集委員、毎月最終土曜に掲載)

拳を手伝ったのがきっかけとなり、自治労の書記局職員へ。29歳だった。

「自治労では社会保障、学校給食やコメの問題など弱者の立場から幸せな暮らしのあり方を探った。労組への関心も今では薄れたが、僕は社会的に大きなインパクトを与えた労働運動の最後の世代かもしれないね」

○団塊の応援団を

「自治労では社会保障、学校給食やコメの問題など弱者の立場から幸せな暮らしのあり方を探った。労組への関心も今では薄れたが、僕は社会的に大きなインパクトを与えた労働運動の最後の世代かもしれないね」

「今もなお、全共闘への思いからふっきていない。あのまま続ければ、僕も死んでいただろうし、生き延びたいという後ろめたさがありますから」

「今もなお、全共闘への思いからふっきていない。あのまま続ければ、僕も死んでいただろうし、生き延びたいという後ろめたさがありますから」

「00年には、「あれから30年、これから30年、団塊世代が時代を問う」をテーマにシンポジウムを開いた。「沈黙の世代」ともいわれる団塊世代の側から、高橋さんは常に「メン」と言い続けている。

「昔を懐かしむのではなく、高齢社会のなかでどう

「身近に畑がある生活や、地域コミュニティが息つき、ふるさとが輝いていたことを覚えていた世代です。もう一つの人生をどのようにも輝かせることができそうですよ。じっくり考えて、まだ元気なうちに地方へ戻ってほしい」

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

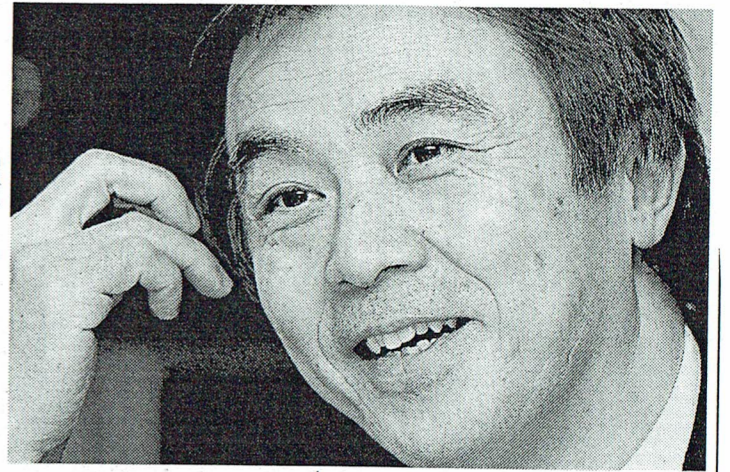
「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「今年9月、東京・大手町で開いた「ふるさと回帰フェア」には8500人もが集まった。

「スローワーク」を提唱する豊田素行さん(58)



セカンド ステージ

「効率とスピード」を最優先する現代社会の風潮から離れ、豊かな生活のあり方を見つめ直すスローライフへの関心が広がっている。豊田さんは、国内最大級のシニアサイト「スローネット」(<http://www.slownet.ne.jp>)を運営する編集長だ。00年7月にオープンして現在、会員数は約5万6000人。インターネットで中高年のセカンドライフを支援している。

1947年、東京都生まれ。00年からスローネット編集長。著書に「『がんばらない』宣言—スローライフのすすめ」など。

とよだ・もとゆき
△妻と3人の娘を抱え、食べるために必死に働くことを迫られた。83年、ソフトバンクのゲーム誌「BEEP」創刊編集長、90年に「コーエー」電

「ちようど出版社の争議が多発したことで、同世代の仲間と労働組合を作った。倉庫のアルバイト学生の契約期限が切れて、解雇された。それから争議が泥沼化し、若い間の10年間、争議にあけくれ、疲れまじだね。経営者も大変だったと思います」

△「父は小学校校長、母も日教組加盟の教員という教育一家。子供のころから、日教組の活動をめぐって家庭でよく話していましたよ」
△「早大で哲学などを学び、小さな出版社に就職。そこで労働争議に直面した」

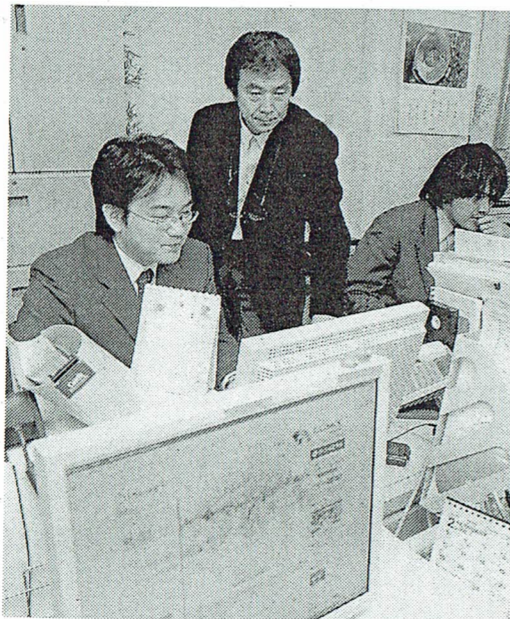
「今や定年即引退どころか、生涯現役が求められています。社会への参加、社会とのつながりを絶ったとき、人は弱り、活力を失いますよ」
そのセカンドライフにこそ「スロー」の考え方が必要だというのだ。
「スローとは、のんびり、ゆったりだけを指すのではない。速さ、大きさ、新しさをよしとする発想から、プロセスを大事にしたり、人々との共生や多様性を尊重する生活流儀のことです」

○働くとはなにか

豊田さんにとって、働くことは身近なテーマだった。

プロセスを大事にしたり 共生や多様性を尊重する生活を

①「若い世代に一つのヒントを」と語る豊田さん—京都市中京区で、懸尾公治写す
②国内最大級のシニアサイトに育った「スローネット」で (中央)



△「00年、京都に拠点を置くスローネットに」
定年を迎えた多くのシニアを取材してきた。自由時間をたっぷり手にして、優雅と呼べるライフスタイルを楽しんでいるように見える。だが、これから定年を迎える団塊の世代には、従来の「定年」観は通用しないよう

○変わる「定年」観

「パソコンの前で長時間労働し、生き急ぐファストな生活でしたよ。でも、一つの企業でプロシエクト立ち上げの任を果たすと4、5年で転職しました」

だ。

「団塊世代が50代を迎えようというときに、バブル崩壊に直面した。自らがリストラに手を染めるか、リストラ対象として苦い経験を強いられ、さらに年金制度の存亡を問われる状況になり、定年後は安穩とはし

ていられません」

企業への苦い思いを抱き、第二の人生への経済的な保障も見えにくい。旅行や趣味さんま、ボランティアでも十分に心が満たされるともいえない。逆に、そんな世代だからこそ何か積極的な可能性があるかもしれない。それを解くキーワードが「スローワーク」と豊田さんはいう。

で築いていくのだろうか。

「団塊の世代がスローな労働、活動を示すことができれば、若い世代に一つのヒントを与えられる。私たちがこれからどう社会を切り開いていくのか、楽しみますね」

ちよつと一言

スロースタイルを「緩流」と呼びかえれば、京都はずっと「緩流」を貫いている。

と豊田さんは言う。そんな京都を紹介したガイドブック「ほっこり京都時間」(とよだもとゆき名・日本出版社)も出している。

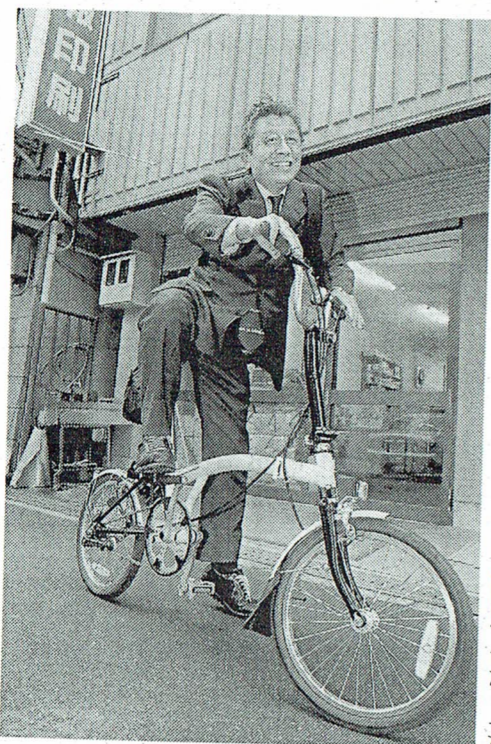
池田知隆の「団塊」探見

(論説委員兼編集委員、毎月最終土曜に掲載)

03年にスローネットをいったん退職後も、後任が見当たらず、今週の前半は京都で仕事をしている。カミさんには「ハンフリー(半分フリー)・ボガートね」と言われていますよ」
深海道の名で「村上春樹の歌」や「探訪松任谷由実の世界」の著書もある。ホームページは<http://www.toyodasha.com>

○スローな労働を

「効率やスピード、利益の確保を最優先することから、社会への公的貢献度を目に向けた労働ができないか。人々のつながりを重視し、活動の喜びを味わうにはどうしたらいいのか」
現代社会の労働について、若者からは「頑張っ」て正社員になっても、リストラされるのがオチだ。と冷やかな声も聞かれる。「やりがい」や「働きがい」が得られる仕事とは一体どこにあるのか、と問いかけてもいる。そんな中で、いったん企業や組織から解放された団塊の世代が今後、どのようなつながりを社会で築いていくのだろうか。



「日本一」明るい経済新聞編集長竹原信夫さん(57)

セカンドステージ

「明るい」ニュースこそが元氣のもとです。おもしろい商売はたくさんありませ

ユニークな新商品やアイデア商法で勝負する会社など、どんなに小さい企業でもおもしろく紹介している。題して「日本一」明るい経済新聞。タプロイド判8頁。月1回発行し、3月で105号になる。記者、カメラマン、編集長を1人でこなす竹原さんは言う。「大変な時代とは、大きく変わる時代です。みなさん、あれこれ知恵を絞って頑張っていますよ」

取材に訪ねる中小企業は年間約500社。新聞

1948年大阪府生まれ。関西大卒業後、日本工業新聞入社。01年、産業情報化新聞社(☎06・6445・7405)を設立し、元氣で明るい企業、情報を探している。

たけはら・のぶお

は公称3万部で、年間購読料は4800円。定期購読者に郵送するほか、保険会社やビジネスホテル、人材派遣会社など、タイアップして顧客に配っている。「自信を無くしている経営者さんにとってビタミソ新聞になればうれいですね」

○東京転勤はイヤ

元々は日本工業新聞の経済部長。赤字を出さないことを条件に、関西の明るい中小企業を取り上げるミニコミ新聞を社内発行していた。だが、2000年10月に東京経済部長への転勤の内示が出た。

「私は大阪生まれの大阪育ちで、関西経済を主に取材してきた。今さら東京でどうやって仕事ができますか」

退職の決断は速かった。古巣の新聞社から「明るい経済新聞」を譲り受け、なりわいとすることを決めた。

「なんとかなるさ」それまで元氣な中小企業を取材し、成功談をたくさん聞いてきた。「だ

景気は「気」から 関西の元氣パワーを発信します

①取材は愛用の自転車

②「明るい」ニュースが元氣のもと」と語る竹原さん(左)と娘の英里さん(右)―いずれも大阪市西区で、幾島健太郎写す

ちよつと一言

「関西発の大手企業がこぞって東京に拠点を移し、今や関西経済の中心は中小企業です。なのに、大手紙は大資本の話題ばかりをワンプターンで取り上げ、関西経済のことも、どこか悲觀的になりがち」。にこやかに語る竹原さんの話に耳が痛かった。

池田知隆の「団塊」探見

(論説委員兼編集委員、毎月最終土曜に掲載)



「た」ら、50歳を超えた自分でもやれる「気」になった。関西の親しい財界人たちは応援してくれた。

○家族も明るく

入社したのは大阪万博の翌年の71年。まだまだ元氣だった関西経済界の第一線を取材した。「毎夕のように取材先から誘いがあり、楽しい時代でした。私は酒を飲まないいで、体を崩さずに済みましたけどね。でも、大手企業のサラリーマン社長よりも、中小企業の経営者の方が人間味が豊かで、ずっとおもしろいですよ」

新聞は妻美智子さん(58)と長女英里さん(30)の3人で発行。取材には大抵折り畳み自転車を利用している。

「自転車は健康にも環境にもいいし、街の変化もよく見える。もちろん交通費を節約できる。今では家族一緒に夕食も取れるし、みんなも喜んでくれています」

○企業に元氣格差

取材先には事欠かない。不況といえながらも、前向きにワクワクしながら仕事する元氣な経営者はたくさんいる。「ヒト、モノ、カネを

「景気はまだまだ先行不透明」というような冷な分析も必要だが、「景気から」という面があるのも確か。経営学でなく心理学の視点も必要のようだ。消費者がどう思い、世の中がどう動いているのか、そのことを机上で語るよりも、肌身で感じる力をつけるのが実学なのかもしれない。

めぐる情報環境は中小企業と大企業の間でそう差がなくなった。あとは知恵の勝負。スピードの時代、素早く決断でき、小回りの利く中小企業の左が絶対有利です。その時経営者がかいかに明るく振る舞えるかどうかというのはすごく重要ですよ」

定年を目前に、団塊の世代で新たに起業への夢を抱く人も少なくない。「企業の間では「元氣格差」が広がっている。ちよつとした事業の工夫や知恵を使い、実際に働く人が元氣で、その差はやはり経営者のやる気にかかっている」

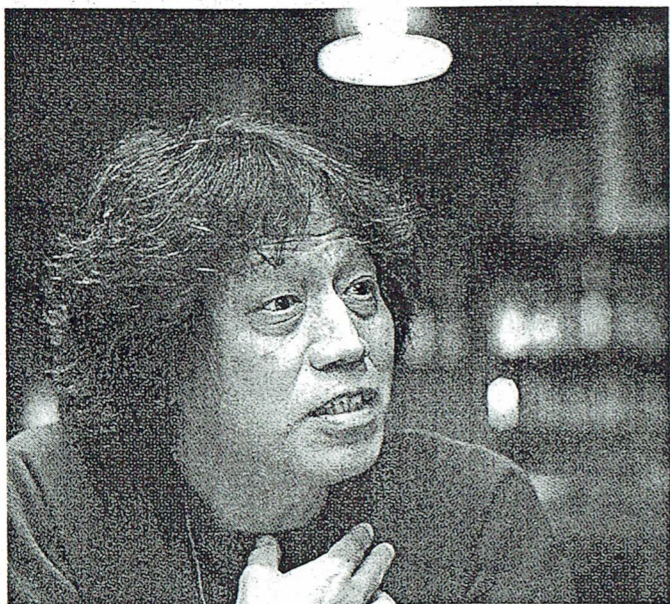
団塊の世代に果たしてどこまで、やる気のある人材がいるのだろうか。「きつといますよ。そんなふうに向きに明るく考えないといけませんよ。ただ昔の大阪の商人が社会への恩返しを精神を発揮して施設などを寄贈したように、団塊の世代も、社会への貢献意識を持って前向きに生きてほしいですね」

このページは来週(4月1日)、休みます。

おにわりの

このページは来週(4月1日)、休みます。

全国ツアー30周年を迎えたシンガー・ソングライター 豊田勇造さん(56)



「自分で自分を励ましながらかける仕事をやっているのさ。列車を走らせる勇達の歌……」

4月上旬、豊田さんは鉄道マンへの応援歌を歌っていた。ホームグラウンドのライブハウス「拾得」(京都市上京区)でのことだ。パワフルなギター演奏。静かで泣いているように聴こえるハイモニカの音。訴えるような歌声が心にしみる。

JR福知山線脱線事故からまもなく1年。営利を追うばかりに安全性を見失った企業の体質や日本社会の断崖が次々と明るみにされてきた。

「事故にあった人や遺族の怒りと悲しみは深い。だが、鉄道員へのひどい嫌がらせや行き過ぎたパッシングもおかしいし、悲しい。鉄道で働く人たちがまたつらいだろうな、と思いますよ」

その歌は、昨年9月の群馬県でのコンサートの

1949年京都市生まれ。関西フォークの草創期からのシンガー・ソングライター。とよだ・ゆうぞう 著書に「歌旅日記アジア編」など。公式サイトは<http://www.toyodayuzo.com>

あと、深夜、ホテルの窓辺から見た貨物列車が走る風景から始まる。

「通り過ぎる駅に人影は無い。こんな夜中に貨物列車が走ってる……」

目の前にその光景が現れるようなリアルな歌詞。人知れず、黙々と鉄道を支える人々への思いやりが歌に込められている。

△ギターを手にしたの小学5年生。高校2年で「ヒロシマ」を自作し、フォークコンテストに入賞した。

「最も影響を受けたのはボブ・ディラン。美しい声がいいのではなく、自分の気持ちを自分なりに歌ってもかまへん、と教えてくれたから」

ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)活動などにかかわりながら自主コンサートを続け、同志

感じたことを形にしたい／願いはそれだけ

写真⑤「自分の思いを歌に乗せたい」と語る豊田さん(京都市上京区で同⑥歌と暮らしが一体となった演奏)いづれも貝塚太一写す

池田知隆の「団塊」探見

社大学へ。

「大学紛争で敗北後、解体を叫んだ大学に残るのにはできなかった。自分なりに納得した生き方を選びたかったのです」

大学を去り、日本各地でライブを開き、旅をして回った。自分は一体何者なのか、何を伝えたいのか。自らに問いかけながら歌を作り続けた。

「旅を通して、街と街の中に△田舎△があるのではなく、田舎と田舎の中に△街△があると思うようになった。普通の人の暮らしがよく見えるようになった」

ジャマイカ、ニューヨークを回り、タイのバンドと知り合って88年夏、

タイに住んだ。

△お米についての論文が毎日農業記録賞優秀賞を受賞。94年に「タイ米ブルーズ」を発表

「日本にいたと、有名になりたいたと気持ちが強くなりがち。だが、タイでは、日々の生活の中から歌を作ればいいと自然に思えるようになった。アジアの目線で考えることができたよ」

「感じたことを形にしたい／願いはそれだけ」

「田中一村」という歌の一節だ。奄美大島で暮らし、死後に高い評価を受けている画家を歌っている。

「生きていくうちに僕

の歌を聴いてくれる人に恵まれ、田中一村に比べたら幸せですよ。ただもう少し多くの人にも聴いてもらいたいけどね」

△母親が倒れたために10年前、京都に戻った。全国ツアーを始めて30年。今も各地で年100回ものコンサートを開き、まだ旅の途中だ。

「誰でも働いて子供を育てるのは大変なこと。団塊の世代もかつて社会に真剣に向き合ってきたが、それは夢ではなく、本当にあったこと。さあ、もういっぺんと自分の夢をもう一度、つないでもらいたいな」

団塊の世代の中にも、今も昔も変わらない夢を持ち続けている人も少なくない。今も変わらず自分の歌を歌い続ける豊田さんはそう思っている。(次回は5月27日掲載予定)



豊田さんは「パンを焼くように歌をつくる」というファン評がある。パン屋さんが日常をパン生地

地に込めるように、彼は旅と暮らしから発酵させた風景を歌に込める。そうしてできた歌は、日々生きる糧になるというのだ。

既成の音楽プロダクションやレコード会社などの商業主義に乗らない。どこまでも自分の言葉を歌に乗せることを大切にしている。「スローフード」や「スローライフ」という言葉があるが、豊田さんの音楽も地域の人々の生活や思いに根ざした「スローミュージック」といえる。

(論説委員兼編集委員)

セカンドステージ

ちよつと一言

マンガによる国際交流の夢を語る 里中満智子さん(58)



「今、悲願なのは北朝鮮のマンガ家たちを仲間にする事です」
日本のストーリーマンガ家を中心とした「マンガジャパン」の事務局長。日本のマンガ文化を世界に伝え、マンガ界の国際交流を図っている。96年から日本、韓国、中国、台湾、香港の五つの国・地域が参加する「アジアマンガサミット」を開いてきた。来年は「国際マンガ家大会」との名称で香港で、08年は京都で開く。「北朝鮮のマンガには、日本をやってつけるぞ」というプロパガンダが多い。でも、理解し合えるはずです」

1948年1月、大阪市生まれ。16歳で第1回講談社新人漫画賞を受賞し、さとなか・まちこプロのマンガ家としてデビュー。日本漫画家協会常務理事、マンガジャパン事務局長、大阪芸術大学教授。

ら、鬼ではないはず。日本の国をもっと知りたくなった」と言われた言葉が忘れられない。
「マンガは感情に訴える媒体で、読者が自分で読んで理解していく。政治とは関係なく、日本人の心が伝わるのがうれしかった」

△大阪の淀川沿いで小、中、高校時代を過ごし、在日韓国・朝鮮人の問題は身近にあった▽
「振り返ると、小学校の時は70人学級で、在日の子も数人いた。にぎやかで、ひしめき合い、自分のことを分かってもらうのが大変で、積極的に発言する人が多い世代かな」
戦後教育を受け、社会主義がバラ色に見えたこともある。でも、野たれ

マンガ文化を継承するのは私たちの責任です

写真⑤「マンガの力を信じています」と語る口調は熱っぽい—大阪芸大で
同⑥「マンガは一人で、何でも表現できます」と若者たちに、いずれも貝塚太一写す

池田知隆の「団塊」探見

死にしても好きなマンガを描きたかった。
「だから、お上からの仕事に就けと言われたら、嫌だし、その点だけで日本は社会主義国になつてほしくなかった」
△高校3年の1学期に中退して上京。団塊世代のマンガ家のトップランナーとして活躍する▽
幼いころから、「王子さまと末永く幸せに暮らしました」というシンデレラよりも、「精いっぱい努力しても、幸福にならない人生がある」と教えてくれた人魚姫の物語にひかれた。それまでの少女マンガの、何を考えられているのかはつきりしないヒロインが嫌で、「愛」をテーマに行動する女を

主人公にしてきた。
「女だから不利とか、かわいそうとかいうようなヒロインは絶対に描きたくなかった。編集者からは、せりふが多い、理屈っぽいと言われ、結果的に強い主人公ばかりになったけど、女の子は強いんですよ」
△プロになって40年余り。離婚やがんとの闘病も体験した。万葉集の世界をもとに持統天皇を主人公にした「天上の虹」の連載は20年以上に及び、読者は高校生から60代まで幅広い▽
「政治の仕組みや心の動きを描いてきたけど、同世代の友人は、こんな歴史の勉強をしたかったとか、これから自己表現



韓国や中国でマンガ、アニメのパワーアップが著しい。里中さんは「マンガは読者のもので、どこの国のものであろうと、楽しめればそれでいい」という。バラエティーに富んで、キャラクターが面白く、何が出てくるか分からないのが日本のマンガ。そんな多様性こそが日本マンガの武器だそうだ。
マンガを通して世界の人たちの間で感性や物語の共有ができれば、未来は明るい。やがては、サミットに集う首脳が子供の時に読んだ「ドラえもん」などマンガの話題で盛り上がる時代が来るかもしれない。
(論説委員兼編集委員)

「世界に誇れる日本のマンガを築いた先輩たちの作品が消えていくのは悲しい。ヨーロッパでネサンスが起きたのも、それまでの資料が残っていたから。戦後のマンガの資料が消えれば、100年、200年後にはどうしようもなくなる。マンガ文化を継承するのは私たちの責任です」
(次回6月24日掲載予定)

× ×
「社会的に発言するのは大人の義務ですから。覚悟して発言しなくてはならないし、鍛えられますよね」
今、最も力を入れているのは「日本マンガ資料館」構想。マンガの歴史資料をデジタル保存し、インターネット上で公開するもので、英語、スペイン語、中国語などに訳し、世界各地で楽しめるようにするのが夢だ。10年がかりで取り組む。

セカンドステージ

日韓共生への希望を語り続ける在日2世朴慶南さん(56)



「だれかより上だとか下だとか、人と比べることはないんですよ。ただ自分でありさえすればいいと思うんです」
 京都で開かれた講演会で朴慶南さんは熱っぽく語りかけていた。在日韓国・朝鮮人2世として生きてきた自分のこと、日本と朝鮮半島の歴史や課題……。いろんな人々との出会いやエピソードを交えた内容に「元気をもらった」と笑顔を見せたり、涙ぐむ人もいた。

「縦の関係ではなく、人も国も横に並んでつながっている。そんな水平の視線が今、すごく必要なんじゃないかな」
 ユーモアとベロソスに富んだ語り口。優しい顔からほととびるパワーはどこから生まれているのだろうか。

「89歳の今も家業の工場でフォークリフトに乗る父や、汗を流して働く人たちに囲まれて育った。そんなたくましい生命力が私にも伝わっているのかも知れない」

1950年1月、鳥取県生まれ。在日コリアンとして作家活動を行っている。著書に「私以上でもなく、私以下でもない私」(岩波書店)など。

△父が7歳、母が2歳のとき、朝鮮半島から渡ってきた。先に来ていた祖父は関東大震災のとき、多くの朝鮮人がデマを信じた人たちによって殺された中で九死に一生を得た▽

「1959年、祖父は北朝鮮帰還事業の最初の帰還船で新潟港から帰国した。祖父は、長男だった父を北に連れて行くこととしたが、父が嫌がった。弟の叔父が「兄さんの代わりに行く」と言ったのです」

△その祖父は帰国して2年後に亡くなり、叔父も「昨年他界した▽」
 「父は自分の身代わりになってくれた叔父に申し訳ないという思いを、ずっと持ち続けていました。今も北朝鮮で暮らす叔父の家族を支えています」

△鳥取で生まれ育ち、京都の大学に進学した時に、それまでの通名から本名へ▽
 「本名を名乗るようになってから、より自然で「ラク」になった。日本人の友人との関係もより深まったように思えます」

セカンドステージ

民族も国境も超えた非暴力社会を目指したい

写真⑤「すてきな人はたくさんいますよ」。出会いへの興味は尽きない
 同⑥「必ず道は開かれます」と語りかける朴さん—いずれも京都市内で、小川昌宏写す

△大学卒業後、同じ在日韓国・朝鮮人2世と結婚して東京へ。3人の子もすべて本名を名乗る▽
 30代の終わり、韓国で就職した夫と離れ、自立の一步を踏み出す。「儒教の影響や家父長意識の強い父はとて怖い存在でした。結婚も父から言われるままに見合いした。でも、女に生まれたという抑圧感をはね返

し、自分が自分であるために自立したい」と。
 資格もない。キャリアもない。友だちから紹介してもらった報道写真集のキャプションを書く仕事が始まった。
 「とにかく、なんでも引き受けましたよ。自分の中にある力を信じて」
 アナウンサー塾に通い、ラジオ番組を担当。若い人の人気を集め、構成作家、エッセイストと

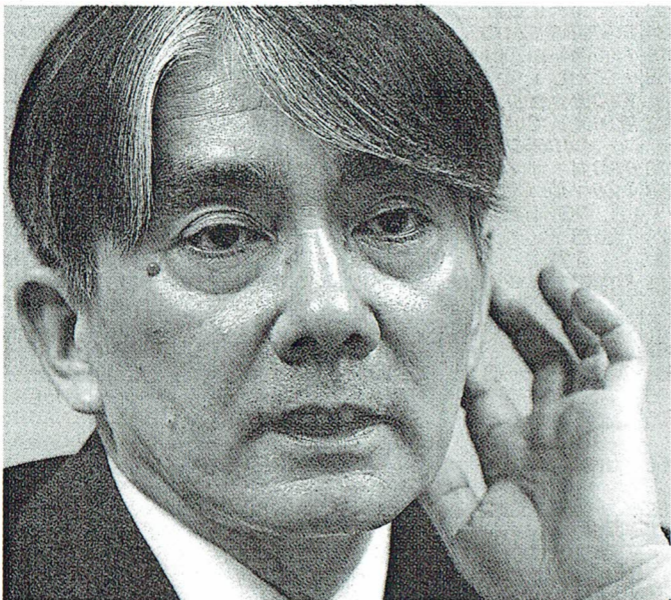


池田知隆の「団塊」探見

人間はみな、それぞれプラス、マイナスがある。マイナスかけるマイナスはプラスになる。人との出会い、自分の意識を通して自分のマイナスを大きなプラスに変える「マイナス変換式」の生き方を朴さんは呼びかける。
 「命さえ忘れなきゃ」「なんとかなるよ、大丈夫」とプラス思考の見本のような体験談、エッセー集をたくさん出している。難しい本とは限らな題名だが、内容は意外と心に深く残る。
 (論説委員兼編集委員)

「11年前、突然の大病で生死のふちをさまよった。今はすっかり元気になったが、生きているのではなく生かされていると実感しました。もっと命がわくわくする出会いを重ね、人生の主人公でありたいといっそう願うようになりましたね」
 △タレントの中山千夏さん、コンサルタントの辛淑玉さんと「おんな組いのち」のネットワークをつくり、元祖世話人を名乗る▽
 「暴力や戦争を許さず、いのちを大事にする、戦争より協調、上下より水平といった女性的価値観でつながっていくということ。『おんな組』といっても、男性ももちろん入れます。民族も国境も超えて、だれもがその人らしく、のびやかに生きていける非暴力社会を目指したいですね」
 団塊の世代には「みんなまだまだ元気で、女は特にエネルギーをためていますよ。たくさん宿題を抱えているはずだし、後悔しないように生きてほしいな」と語る。
 (次回は7月29日掲載予定)

日本国際ボランティアセンター(JVC)代表理事 熊岡路矢さん(59)



「ブーチン(ロシア大統領)は2時間も議論に付き合ってくれた。国内政治の腐敗やチェチェン紛争も、とても率直に語っていましたよ」

今年7月のロシアでの主要国首脳会議(G8)に先立ち、ロシアのNGO(非政府組織)が主催した国際NGO会議のことだ。日本から出席した熊岡さんは「ワンフレーズ」が得意な小泉首相は2時間も議論ができるかどうかか……と話す。

NGOは今や国際社会で無視できない存在だ。JVCも外務省、JICA(国際協力機構)との連携を深めている。難民支援を始めた当初、一生、アウトサイダーとして生きると思っていた。でも、時代の風を受けながら、いつしか社会の内側とも交流し、いくらかでも影響力を及ぼせるなんて、予想外でした

1947年2月生まれ。インドシナ難民救援活動に取り組み、95年からJVC代表理事。くまおか・みちや 東京大特任教授。毎日国際交流賞選考委員。著書に「カンボジア最前線」(岩波新書)。

△東京生まれ。父は独文学者、母は横浜の国際学校で育ち、英仏語に堪能だった。祖父はドイツに留学し、海外事情に詳しい国際派の海軍軍人。1945年6月に戦死した。

まるで「地球市民」をはくむような家庭だった。祖父や、戦時中に通信社で働いていた母の話聞き、なぜ日本は戦争を始めたのか、もっと早く戦争をやめなかったのか、と考えさせられた。当時としては随分と変わった不思議な家庭でした。

△66年に東京外大中国語科に入学。ベトナム戦争が激化し、中国では文化大革命が始まった。そのころ、中国社会の動きが新鮮に見えた。大学紛争では無党派だったが、最後までパリケードに残った。試験用紙に名前を書けば、卒業させると言われたが、それが嫌だった。

数千冊の本を読むより 難民キャンプこそが私の大学でした

①「地球社会の相互扶助を」と訴える—毎日新聞大阪本社で、山田耕司写す
②津波の被災地の子どもを励ます熊岡さん—タイで05年1月写す(熊岡さん提供)

池田知隆の「団塊」探見

△70年3月に中退。自動車整備士になり、職業訓練指導員、技術翻訳士の資格も取った。76年から欧州を貧乏旅行し、パリでのインドシナ留学生との出会いを機に、インドシナへの関心が再び、一気に高まった。

(現在のJVC)が発足したばかりで、難民キャンプで自動車修理学校の開設に取り組んだ。海賊にレイプされた女性、両親を目の前で殺された少年……。難民キャンプで聞いた人たちの体験に激しい衝撃を受けた。結局、それからカンボジアやベトナム、タイに計10年以上滞在した。

カンボジア難民があふれていた80年3月、「少しでも役に立ちたい」と自動車修理の仕事を始め、航空券と40万円を手元にタイへ。33歳だった。

「まあ何とかなるだろうと。楽天的な気分だけでしたね」

バンコクの日本人会の中に日本奉仕センター

「今思うと、難民キャンプこそが私の大学でした。数千冊の本を読むより貴重な経験だった。いつまでたっても、卒業はできませんが……」

△ボランティア仲間の看護師と結婚。子供はいない。

80年代はNGOやボラ



ンティア活動は「女、子供の世界」と言われたが、90年代になると背広にネクタイ姿で高学歴の若者たちの就職対象にもなった。90年代後半からは中高年が新たな生き方を求めてやってきた。

「従来の日本はいわば縦割りの官僚主義社会です。私は早めにドロップアウトしてライフワークをつかみ、定年はない。だが、これからの市民社会では、私のような生き方やNGOの役割がもっと求められるのではないかな」

今年10月には、「パリ和平協定」締結15周年を記念したカンボジア市民フォーラム・シンポジウムを開く。2年後、日本で開くサミットに合わせた国際NGO会議の準備も始めた。

「日本の国際援助は今後『人間の安全保障と貧困削減』を絞り、外交や国益から切り離れた方がいいのではないか。地球社会の相互扶助が求められていく。私もこれから、もっと自由に動ける立場になって、若い人の育成にもかかわっていきたい」

(次回は8月26日に掲載予定)

熊岡さんは大学を卒業直前に退学し、自動車修理工になった。そうしたのは「精神労働と肉体労働」などの差別の克服を掲げた文化大革命の影響を受けたからだ。その後、文革やカンボジアのポル・ポト政権の暗部を目の当たりにし、政治の過酷な現実を思い知らされる。

戦後の混乱期に育った団塊の世代は、親たちの戦争をどう受け止めたのか。戦争の直接的な体験はなくても、次世代に語り継がなくてはならないことがあるのではないか。団塊世代の戦後責任についても考えさせたい。

(論説委員兼編集委員)

ちよっと一言

セカンドステージ

関西から「ユニバーサル」の風を広げる 竹中ナミさん(57)



自らを「学歴は中卒。障害児を抱えたバツイチの57歳のおばちゃん。それから体重もすごいんです」とあっけらかんと語るから、大抵の人がファンになる。いつしか国内外の官僚、自治体関係者、企業、団体の間に多くの仲間が広がり、誰もが親しみを込めて「ナミねえ」と呼ぶ存在だ。

1948年生まれ。ITを活用した障害者の就労を支援する「プロップ・ステーション」理事長(本部・神戸市)。著書に「ラッキーウーマン」などがある。

「チャレンジドを納税者にできる日本」をスロガンに、障害者の就労支援活動を始めて15年になる。チャレンジド(Challenge)と挑戦する人)とは、障害という課題に挑戦する人というポジティブ(前向き)な意味を込めた米語だ。

「日本では、障害者は保護の必要なかわいそうな人と見なされがち。でも、障害者が収入を得て納税者として社会を支えていかなくてはなりませんよ」

「神戸市生まれ。旧京都帝大卒の父は大会社の幹部候補生だったが、レックパージの余波で解雇される。内職を続けた母は、女性解放運動に関心をもち続けた」

「親からは『お前の人生、好きなようにしたらいい』と言われて育ち、『ゴントクレ(非行少女)になりましたよ』と振り返る。高校1年で同世代の結婚。高校は除籍になった。22歳で長男が誕生し、24歳の時に授かった長女に重い脳障害があった」

「わしがこの孫を連れて死んだら、と父が言うのでびっくり。父を死なせないためにも、私たちが親子が楽しく生きるしかないと思いますよ」

障害者が収入を得て納税者として社会を支える道を

- ①「すべての人が誇りを持てる社会に」と語る竹中さん
- ②明るい竹中さんの周りには笑いが絶えない—いずれも神戸市東灘区で、武市公孝写す

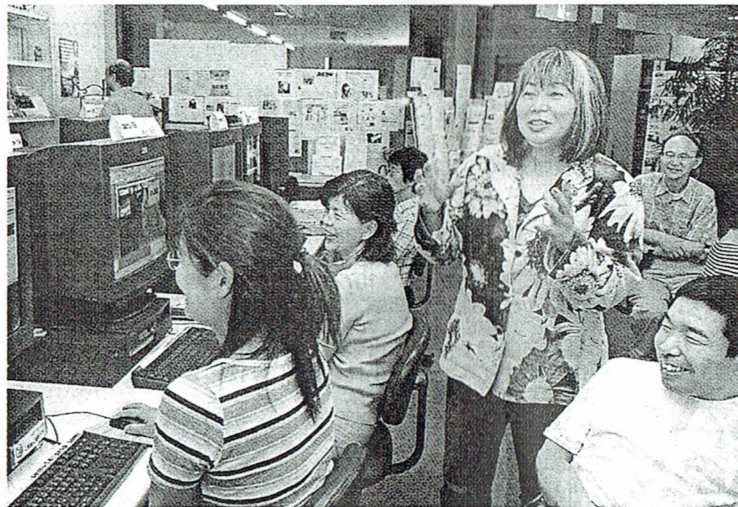
池田知隆の「団塊」探見

毒な弱者と見なす考えに違和感を抱いた。「障害者を哀れみ施しの対象と見ると、障害者の可能性や社会進出の機会を奪いかねない。障害があっても、どうやって楽しく生きていくのか。自分なりに納得できる答えを探してきました」

障害者にも労働意欲があると91年、IT(情報技術)を活用した団体「プロップ・ステーション」をつくった。プロップとは「支えあい」を意味する。講習料をめぐって障害者から金を取るのかと非難が出たが、「自立のために自己投資するのは当然」とはねのけた。

△43歳で離婚。引き取った長女は国立療養所で預かってもらった

「娘の入院費の明細を見ると、月に数十万円も税金で負担してもらっている。そんな娘より先に



安心して死んでいくためにも、誰もが支えあう社会をつくりたい」

自ら「つなぎのメリケン粉」と称し、ネットワークづくりは得意だ。08年、法人化に際してはフイクロソフト・ジャパン社長(当時)の成毛眞さんが賛同し、基金1億圓を支援した。

△4月には障害者自立支援法が施行。さらに「ユニバーサル社会基本法」の実現に向けて奮闘中。団塊の世代が定年を迎え、日本は急激に高齢社会が進む。

「その人に合った働き方を求めているのは、チャレンジドだけではなく、定年後も働きたい高齢者も同じ。障害があっても生まれようが、人生半ばで障害者になるのが、誰にでも学ぶチャンス、働くチャンスを持てる日本にしたい」

熱っぽく劇的に生き半生を振り返り、しみじみと語る。

「娘は私にとって(四)葉のクローバー。自然の中では異端ですが、幸井のシンボルです。娘のおかげで成長しました」(次回は9月30日に掲載予定)

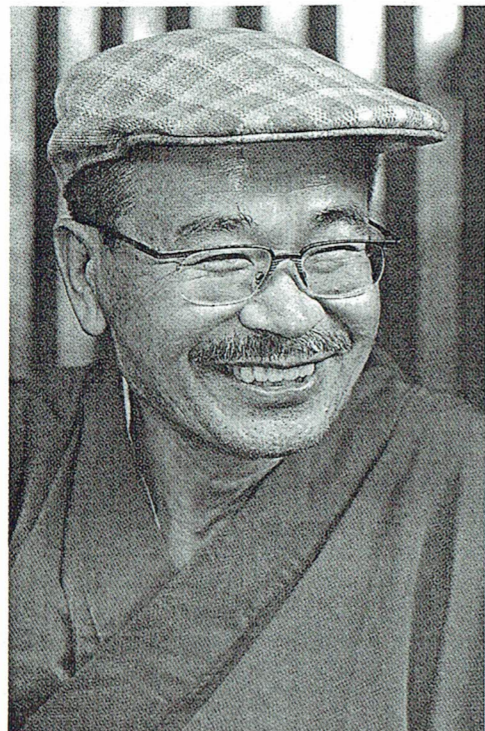
「重度の障害者も今やITを活用すれば、予想外の犯罪ができます」。そう逆説的に語る竹中さんの活動モデルは、米国防総省のコンピューター電子調整プログラム。最先端の科学技術を使って、最重度の障害者を政府職員や企業のリーダーに育てる機関で「すべての国民が誇りを持って生きられるようにすることが国防の第一歩」という考えだ。

人間にとって働くことの大切さ、障害がある人の社会参加のあり方について考えさせられた。チャレンジドという言葉が提起している課題は大きい。(論説委員兼編集委員)

セカンドステージ

ちよっと一言

街頭紙芝居を続ける 鈴木常勝さん(58)



「やんちゃな子供たちがいつもパワーをくれます。にこやかにそう語る鈴木さんは34年も大阪市内の公園で、紙芝居のおっちゃんを続けている。毎月第4日曜日に街頭紙芝居を演じている大阪府平野区的全興寺。境内のヒノキの木陰に集まった子供たちは、鈴木さんの語りや絵が変わるたびに「それ、ほんま」「うっそー」。目前で繰り広げられる物語にぎやかな歓声がわいた。

「街頭紙芝居のいいところは、街角に笑い声が響き渡ること。子供たちと裸で触れ合って遊ぶのは楽しいですよ。」

△大阪市大文学部に入学し、全共闘運動には無党派で参加した▽

「教授の姿を見ているうちに歴史の教師になる気がなくなった。大学前でタコ焼き屋を開き、被差別部落の子供会に通い、学校外に教育活動を進めていったのです。」

△大学に7年在籍し、

1947年10月、愛知県生まれ。しんきゅう師をしながら街頭紙芝居を続けている。立命館大、愛知大などで非常勤講師を務める。著書に「メディアとしての紙芝居」など。

アルバイトで紙芝居屋を始めた▽

「街頭紙芝居の場は、わんぱく坊主やおしゃべり娘にかき回されっぱなし。『こんなの、ありえない』と叫び、こっちはしゃべる前に、筋の先読みを他の子供に得意げに言ったりする。語りのまずさ、言い違いは必ず指摘されますよ。」

街頭紙芝居は「俗悪」「荒唐無稽」「非教育的」と親や教師から非難された。だが、子供たちは学校で習う「美しい話」「優しい心」だけで世の中が成り立っているのではないと感じている。

「街頭紙芝居は子供を世間の悪から隔離するのではなく、それを知る機会を作った。子供はタテマエでは納得しないし、ホントウと見抜く目を持っている。だからハナタシたちの紙芝居への劇評も生き生きしている。」

△大阪市に就職したが、現場から事務職に異動になったことで退職した。82年から3年間、中国医学を学ぶために北京、上海に留学した▽

大人は何を子供に伝えたいのか 方法を見つけてほしい

- ①「子供たちがパワーをくれます」と話す鈴木さん
- ②街頭紙芝居は子供たちと共に楽しむ劇場—大阪市平野区的全興寺で24日、小松雄介写真

池田知隆の「団塊」探見



して語られていた。

「軍国の母と戦地の兵士が家族愛で固く結ばれ、お涙ちょうだいが効果的に使われている傑作もある。その感動の源は何か。それを探るのが今のテーマです。」

△今では大学の教壇でも学生相手に「国策紙芝居」を演じている▽

「反戦という結論を押し付けるのではなく、『自分も巻き込まれるかもしれない』という観点で見せている。『戦争反対』だった知識人が戦争に突入すると、『聖戦万歳』になるからくりを学生と見極めたいのです。」

定年後、地域社会への新たな参加が求められている団塊の世代。大人と子供がちゃんと出会い、笑い声が響きあう街づくりに参加してほしい。子供たちに何を語りかけていくのか、真剣に考えてほしい」と訴えている。

「『怪人二十面相』になるのは無理にしても、職場の顔、家庭の顔の他に地域の顔、芸人の顔をもつ怪人三面相には誰でもなれますよ。変身してみませんか。自分の楽しみのために。」

(次回は10月28日に掲載予定)

中国の路地裏や天安門広場に日本の紙芝居を持ち込んだ。中国には街頭紙芝居がなく、物珍しいうに子供たちが集まってきた。

「子供がいたずら好きなのは万国共通。学校をさぼろうとする日本のわんぱく坊主の話をすると、笑いが爆竹のようにはじけた。たどたどしい中国語のセリフを子供たち

ちはその場で直してくれ。子供たちと本音で話せる場でした。」

△中国大陸各地から台湾、ネパールで街頭紙芝居をして帰国した▽

紙芝居を続け、その歴史を調べるうちに戦時中の「国策紙芝居」に出会った。そこでは「蒋介石はいかに傲慢か」「鬼畜米英はいかにアジアを侵略していたか」が絵解き

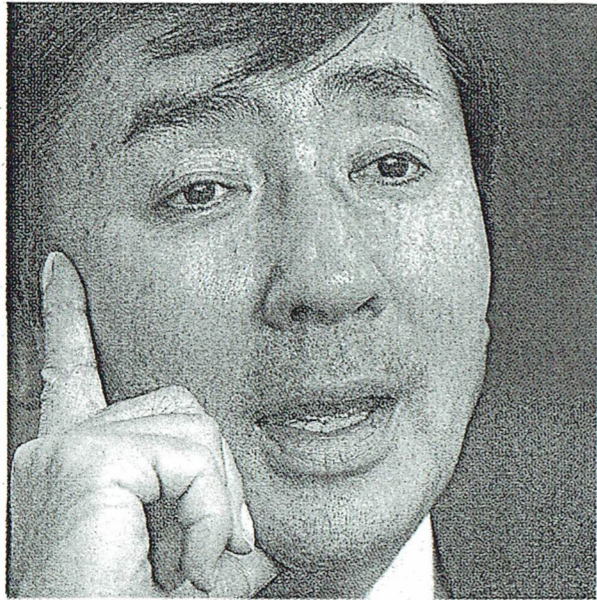
世界では「路上劇場」だった。自転車で紙芝居のおっちゃん。貧しい身なりで、どこもなく苦勞人の誠実さを感じさせ、タダ見もけっこう見逃してくれた。水あめや駄菓子がごちそうのようにおいしかったことも懐かしい。そんな街頭紙芝居が消えて久しいが、その魂は受け継ぐことができる、と鈴木さんは言う。大人のあなたは何を子供に伝えたいのか。紙芝居屋のように、物語として、またお笑いとして子供に手渡す方法を見つけてほしい、という鈴木さんの熱い思いが胸に響く。(論説委員兼編集委員)

セカンドステージ

ちょっと一言

06.10/28

豊富な「情報」で国際情勢を読み解く 手嶋龍一さん(57)



「僕には団塊世代の共通体験がないんです」
 激動する東アジアの情勢分析を巡って活躍中の手嶋さんはこう口火を切った。「高度経済成長」という生活実感、受験勉強、戦後民主主義への信奉——の三つが欠けているというのだ。

「父は北海道の中小炭鉱を経営していた。経済成長とともに炭鉱は衰退し、右肩上がりの経済成長が僕にはどうもピンとこないのです」

受験競争にもまれずに北海道の公立高校でおおらかに過ごした。当時、東京の高校に進学するという選択もあったが、北海道の方がはるかに変化に富んでいた。その決断は正解でしたね」

さらに教科書で語られる戦後民主主義にもクールな目を注いできた。

「父は昔かたぎの炭鉱主で、戦後、生活が困窮していた皇族に石炭を送る一方、坑内作業員をとっても大事にした。破防法

1949年北海道芦別市生まれ。NHKの政治部などを経てワシントン支局長を務めた後、外交ジャーナリスト、作家として活動。早大客員教授。著書に「ウルトラ・ダラー」など。

適用の第1号、三無事件といわれるクーデター未遂事件の関係者も父の元に逃げてきたようです。一方で、最左派の炭鉱労組幹部も父から資金をもらい、喜んでた」

炭鉱経営者の家庭を通して、「右」も「左」もない人間のつながりの大切さを知ったという。

慶応大学経済学部に進学。70年と71年、文化大革命のさなかの中国へ。偶然、友人が中国旅行参加者募集のチラシを持っていたのです。2回目の71年夏、故周恩来首相と会談し、そのときの通訳が先日、中国代表として北朝鮮に行った唐家璇さん(現国務委員)でしたよ」

学生当時、父が残した財産を切り売りした後、アラビア石油株で相場を張ってお金持ちになった。「ぶらぶらしているのも周りへの体裁が悪

セカンドステージ

世界が舞台 でも最後に帰るのは友だちがいる北海道

⑤「時代の真相を見抜く知性こそ大切」と語る手嶋さん
 ⑥自分の目や耳で確かめたことしか語らない—大阪市内で17日、いずれも山田耕司写す

池田知隆の「団塊」探見

い。英国BBCに勤める主人公のスパイ小説をたまたま読み、軽い気持ちでNHKを受けました」

74年、NHKへ。室蘭、横浜放送局を経て政治部に移り、外交・安全保障を専門に

さん決定とスクープした。それが手嶋さんの情報だった。「記者クラブ制度は僕の性にあわない、と報道協定を破ったのです。ジャーナリズムは、時には組織の論理に服さないものですよ」

から自由の身にしてほしいと頼んでいましたよ」

「NHK元職員のと2人暮らし」

拉致、偽ドル……世界を動かす情報(インテリジェンス)の世界を描いた小説「ウルトラ・ダラー」を今春出版するやべストセラに。ノンフィクションの形では書けない秘密の情報をふんだんに盛り込んだ。

NHK入局直後、何カ月間も給料を受け取らなかった。「こんなに安い給料で、人に命令されているのはたまらないと思っただけです。自由にふるまっていたら、組織のあぶれ者になりました。ちょうどロッキード事件が起き、右翼の児玉蒼士夫氏だったら手嶋が知っているじゃないかと言われ、社会部に応援に行きました」

94年にハーバード大学に招へいされたのが転機になった。「そこは金脈派でした。世界各地の有力者とのつながりが一挙にできました」

「機密情報というか諜報の世界は戦後長い間、日本にはほとんどなかった。それほど厳しい政治的な判断を下す必要もなかったともいえます。だけど、経済大国は宿命的に情報大国でもあり、これからはそれなしではやっていけませんよ」

87、91年、ワシントン特派員に。米紙ワシントンポストが皇太子妃に小和田雅子

9・11米同時多発テロの際、ワシントンから24時間連続中継を1日間にわたって担当。独特の柔らかな口調による解説に多くのファンができたが、昨年6月にNHKを離れた。「もともと組織の中になじめない。早く

定

東京を拠点に情報の収集、分析で多忙な日々を過ごしている。だが、最後に帰る場所は「北海道の友だちのところだ」(今回は11月25日掲載予定)



3冠馬デビューインパウトを生んだノーザンファーム代表、吉田勝巳氏とは30年来の友人で、手嶋

さんは仕事場を東京・六本木と北海道のノーザンファームの一角に置いている。福岡の炭鉱主一族の麻生太郎外相とは、京都で古いなじみの「お茶屋さん」が同じだそう。北海道と九州と離れた2人が京都の花街でつながっているのもおもしろい。

来月出る「ライオンと蜘蛛の巣」(幻冬舎)は、世界各地を舞台にした小説のようなノンフィクションで、楽しみだ。(論説委員兼編集委員)

ちよっと一言

エコライフを生きる人形作家 森小夜子さん(57)



△奈良・吉野の山あいの村に生まれた。大阪で戦災にあった両親が疎開

「人形を創ることは自分と向き合うことなので」
京都・嵯峨野の人形工房で和服姿の森さんは静かに語り始めた。小倉山のふもとに広がる約1000坪の庭に、夫の孝之さん(68)と循環型の生活空間を作り、20年前から一般開放している。
約200種、1000本の木が茂っている小さな森の中に、アトリエのほか、軒の居宅、菜園、温室や人形展示室、喫茶店がある。このエコライフ・ガーデンを「アイトワ」と命名、「愛とは?」「愛と環」「愛永遠」の三つの意味を込めた。天気の良い日には、樹木や草花のそばに妖精のような人形を置いている。「人形は、人の形をした小さないのち。自然と共生する暮らしを子供たちに伝えたい」

1949年生まれ。京都・嵯峨野で夫婦で自然と共生する循環型の生活空間を作り、創作人形工房を開いている。著書に「人形にいのちを込めて」など。

し、電気も水道もない開拓村で、5人兄妹の4番目として生まれた。お茶でも何でも自分で育った。親の手伝いも私には遊びでした。小学2年のころ、木の枝で初めて人形を創った。「大阪の繊維会社に勤めていた姉が送ってくれた生地見本帳が私の宝物です。その布のはぎれで人形の洋服を作り、髪の毛はトウモロコシのひげを使いましたよ」
△兄を頼って兵庫県西宮市で中学、高校を過ごし、デザインの専門学校へ。商社で働いている時の上司、孝之さんと結婚。24歳だった。孝之さんは戦争末期に疎開した嵯峨野で庭に樹木を植え続けていた。海外出張の多い夫のいない時間に、一人で始めたのが人形創りだ。「小さいころから洋服屋さん、帽子屋さん、美容師さんらの手仕事にあこがれていた。人形を創れば、そんな夢が全部かなうと気付いたのです」

若い世代に何を伝えたいか 今一度はつきりさせなければ

①「古い布に思いをめぐらすのが好き」という森さん
②衣装の色合わせが一番楽しい時(森さんは右から2人目)＝京都市右京区で、懸尾公治写真

池田知隆の「団塊」探見

△人形に魂が宿る瞬間に喜びを感じた。近所の主婦から「教えて」と声をかけられ、教室を開くと生徒が増え続けた。その語らいの場として喫茶店を開き、庭も開放した。少数民族の衣装をまとった人形が多い。「民族の讃歌」をテーマに展示会を開いてきた。
「中国雲南省の少数民族の母娘が刺しゅうをしている写真を見たのがきっかけです。目先の豊かさに惑わされず、伝統や文化に誇りを持っている人の暮らし方に共感しました。日本がバブル景気のころで、子供は塾に、母親もパートで忙しく、日本は変な方向に行く、と思いました」
「アイトワ」では、野菜や果物を作り、し尿は有機肥料に、生ごみは堆肥に使い、自己完結型の生活を目指している。関西でいち早くソーラー発電設備を導入し、エアコンは今も使っていない。「庭仕事はすべて夫と



の共同作業です。四季折々、朝昼晩、あたりの空気を胸いっぱい吸い、人間も自然の一部であると感じています」
△同居していた夫の両親も亡くなり、今は夫と二人暮らし。子供はいない。わが家では、両親も含めてだれも生命保険をかけていない。伴りよを失って手に入るお金を食いつぶすような生活は嫌です。「人生残っても、それよりもお互いが健康なうちに、日々暮らしていきけるペースを作りたかったからです」
経済成長と共に生きた団塊世代の多くは、「消費」中心の生活に追われてきた。自然の中で淡々と暮らす森さんは「私、これまで順調すぎたから、これから地震か何か大変なことに出合うかもしれないかもしれません」とこやかに語る。「でも、生きるうえで自信や誇りは、自分の行いや生活からできてきます。どんな社会や家庭を築いてきたのか、私たちは今一度、若い世代に何を伝えたいのか、はっきりさせなければなりません」(次回12月16日に掲載予定)

ちよつと一言
何が楽しくて、楽しいことなのか。それは幼いころの体験が影響するようだ。森の妖精のような小夜子さんは「自然に触れ合えるこの暮らしは楽しい。そうは言っても、消費生活に慣れきった人たちには共感してもらえないかもしれないが、伝えていかなくてはなりません」と語る。

世界各地の民族衣装をまとった森さんの人形にはどれも、可愛さというよりも凛としたものがある。「未来を担う子供たちに残すべき生活の文化は引き継いでほしい」。人形の顔をじっと見ていると、無言でそう訴えてくるようだった。(論説委員兼編集委員)

セカンドステージ

手元供養を提案しているプランナー 山崎譲二さん(57)



「突然の父のがん告知。それが始まりなんです」
02年の正月。山崎さんは郷里、松山市に住む父が余命1年の宣告を受けたのを知り、戸惑った。18歳で郷里を離れ、好き放題に生きてきた自分をずっと支えてくれた父に、感謝の気持ちをどう表せばいいのか。そんな悩みの末にたどりついたのが手元供養だ。
遺骨を納めた小さな骨つぼやペンダント、遺影を焼きこんだ身近な置物などを通して故人をしのんで供養しようと、山崎さんは新しい葬送のスタイルを考えだした。約半年後、その製造販売会社をつくった。

1949年11月生まれ。町づくりのプランナーなどを経て、手元供養の事業を展開している「博國屋」(京都市)代表。NPO手元供養協会会長。

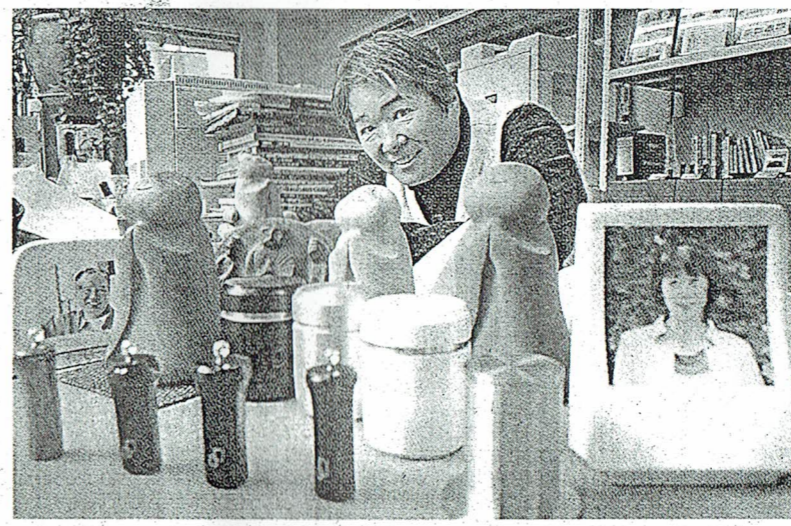
と商売上手の母のもとで3人兄妹の二男として育った。
将来、ダム建設の仕事をしたいと夢見て68年、日本大理工学部に進学。大学は当時、激しい紛争中だった。「ノンセクト(無党派)でデモに行き、社会のあり方に目を開かされた」
紛争終結後、1年間休学して愛媛の黒瀬ダムの工事現場に入った。アルバイトの金でヨーロッパやアジアなどを気ままに旅をして回った。
74年、セゾングループの西武都市開発(後の西洋環境開発)に入社。仙台郊外のニュータウンで日本初のボンエルフ(オランダ語で「生活の庭」を意味するコミュニティ)道路を導入。京都・桂坂の大規模な町づくりにも取り組んだ。
「あちこちの都市開発にかかわり、仕事は面白く、夢中でしたね」
△95年、阪神大震災。六甲アイランドなどで着手していたプロジェクトなどが消え、退社。町づくりなどの企画会社を設

感謝の気持ち 新しい表し方があってもいい

- ①「手元供養は故人と遺族をつなぐものです」と語る山崎さん
- ②自社で商品化した手元供養グッズは約20種になった—京都市南区で、いずれも西村剛写す

池田知隆の「団塊」探見

立した。45歳だった。
「会社は順調でした。でも、父のがん宣告で自分の生き方を振り返らざるを得なかった。目ごろは無信仰で、急に宗教性の強い墓や位はいで供養するのに反発もあった。本当にそれでいいのか、と疑問を感じたのです」
父の家業は兄が継ぎ、二男として父の墓をつくる選択も考えられなかった。



た。だったら、故人の供養、遺骨の保管はどうすればいいのか。
「商品開発は得意な領域です。お地藏さんのオブジェなど居間や床の間に置ける室内墓か位はいの機能を持つ置物をつくらうと思ったのです」
飽きのこない高いデザイン性と素材にこだわった。友人のデザイナーや陶芸職人の協力で、清水焼のオブジェ「おもいで碑」ができあがった。
△「これはいいもんじや」と喜んだ父は、告知から2年9カ月後の04年9月、亡くなった。
父の遺骨は、一部を海にまき、高野山に永代供養の納骨をした。残りの遺灰を写真つけたオブジェに納め、手元に置いている。
「これでよかったのかと一時、心が揺れました。父は机の上のお地藏さんとなってほほえみ、毎朝、生前好きだったタバコを1本お供えています。供養しているつもりが毎日、癒やされ、励まされていますよ」
昨年6月、賛同した会社7社が集まってNPO手元供養協会が発足し、会長になった。今秋の父の三回忌では、兄妹や子供たちは集まらず、それぞれの地で黙とうした。
「お墓は故郷にあるけれど、遠いので墓参りが容易でない。子供たちがお墓を維持していくのは大変だし、新しい供養のやり方があるのもいいはず。私も瀬戸内海に遺骨をまき、一部を手元供養してほしい」
(次回は1月31日に掲載予定)

団塊の世代にとって、これから一番の課題は死を巡る問題かもしれない。故郷を離れ、都会に移り住み、企業社会で生きる中で、お墓の問題や先祖代々の宗教に無関心なまま過ごしてきた人が多いからだ。だが、これからは、そうではすまされない。
都会では、お墓は慢性的な供給不足になっている。お墓や霊園の増加は環境破壊につながり、深刻な都市問題だ。これまでの宗教儀礼やしきたりとらわれない手元供養は、散骨や樹木葬などと組み合わせたりして広がっていきそうだ。
(論説委員兼編集委員)

セカンドステージ

ちよっと一言